

## 教員の長時間・過重労働の実態 —教育現場からの報告と問題提起—

清家 智美

大阪過労死を考える家族の会

### はじめに

中学校国語科教員として非常勤講師の5カ月間勤務を終えて、教育現場の現状を多くの人に認知してもらい、教育への関心を強め、教育の重要性を実感してほしい。

### 1 講師になるまで

私は、言葉を生業とするフリーアナウンサーで30年続けている。同時に劇評などのライター、大学生などに話し方を教えている。なぜ、初めて公立中学校の非常勤講師になったのか。その理由から述べよう。

平成21年以来10年に一度、教員の免許更新が義務づけられた。有効期間は10年間である。この免許更新制は当初から不評で、多忙化する教員の負担になる上、内容が実践的でないなどの指摘が相次ぎ、令和3年になってやっと制度廃止の動きがみられている。文部科学省が決めたことなのに、受講料の3万円は自費というの大きな負担である。

しかし、私は令和2年春の時点ではそんなご時世になっているとはつゆ知らず、今まで教員免許が必要な仕事はしていなかったが、せっかく取得した免許の更新の期限が切れていたことと、会場である母校の大学キャンパスが令和2年度限りということもあり、懐かしい気持ちで昨年8月、30時間の講習を母校で受講した。1日6時間×5日間、なかなかのハードスケジュールである。

夏休みだったので、私以外は現役の教員ばかりだったと思う。ただ、この講習を受けるためには、大阪府教育委員会に講師登録をしなければならない。「教員として働く」意志が必要とされるのである。一応、勤務地と非常勤講師の希望を提出した。すると、講師登録するや否や、講習が始まる前の7月中旬から「今、どこで教えているか」「講師をしてほしい」「常勤では無理か」と近隣の教育委員会から、ひっきりなしに電話がか

かってきて驚いた。それは、1年経った今でも続いている。どうやら、大阪府では教員が足りないらしい。特に中学校では国語科教員が常に不足しているようだ。これは、昨今、大学で文学部が減少していることも理由の一つだろう。

勤務した後でわかったことだが、大阪府で平成20年から実施された橋下徹知事の改策により、教員を含む公務員の給料が大きく引き下げられ、現在もこの状態が継続されている。よって、大阪では教員の成り手が周りの府県より格段に少ないのである。私のような、初めて中学校の教壇に立つものがこれほど求められるとは……。大阪の教育現場の修羅場の一片を見たような気がした。

免許更新講習を終え免許が更新されて「非常勤でもよいので、とにかく1日も早く来てほしい。助けてほしい」と毎日のように連絡があった隣の公立中学校に行くことになった。人生の中で、こんなにラブコールを受けたのは生まれて初めてだった。

市の教育委員会での面接、履歴書・健康診断書・誓約書を提出し、学校長との面接、校内見学、教科教員からの授業内容踏襲、授業見学を済ませ、2学期の中間テストの後の10月20日、授業を開始した。

自分の中学時代といちばん違うところは、名簿が男女混合ということだった。キラキラネームもあり、男女どちらか分からない名前も多く、出欠を取るのに苦労した。初めて、ジェンダーを意識した。校長から「今の中学生は幼いよ」と聞いていたが、一部を除いては、比較のおとなしい生徒ばかりだった。

### 2 勤務形態

私は2年生の2クラスの授業を担当した。私が勤務した中学校は、1学年6クラスずつで、40人学級だ。教室は満杯である。今後、少子化が進め

ばクラスの人数が減るのかと思いきや、クラスの数自体を減らすという。いつまでたっても少人数学級にはならないことになっている。

始業は8時20分だが、まず8時15分に職員全体の連絡(全体、学年)が職員室で行われる。そこで昨日の出来事や本日の注意事項が連絡され、学年ごとの机の島で言葉が飛び交う。緊張する一日の始まりである。そのあと担任を持っている教員が、鳥が巣を飛び立つように一斉に教室に向かう。8時35分までが朝の読書とホームルームだ。職員室は一気に静かになる。

8時40分～9時30分が1限目。10分の休憩をはさんで、50分授業が午前中に4限行われる。この休憩の10分間がくせ者である。授業をした教室から職員室に戻り、授業の2分前には次の教室に入っていなければいけない。職員室と教室の階は違うので、移動に2分ずつかかるとすると、4分+2分(予備時間)で、残り4分が休憩時間である。これではトイレもろくにいけない。私は慣れていないということもあり、初めから2クラスの授業の間に1時間空けてもらうことにしていた。これが正解で、精神的にも肉体的にも大変助かった。何しろ、私は中学校教師初体験だったのだから。

私の授業は2クラスだけだから、午前中週4日みの勤務のはずだった。しかしその考えは甘かった。

### 3 仕事内容

1日2時間、授業をしていけばよいのではなかった。まず、授業では教科書を学習指導要領に沿って教えていくのだが、生徒のノートのとり方が決まっていた。教師が用意した单元ごとのプリントを自分のノートに貼りつけ、授業を進めながら埋めていく。生徒は各自ハサミと糊を持っている。1ページの上部が黒板の内容を写す板書スペース、下部の3分の1が自習スペースである。自習スペースには授業中に興味を持ったことを調べたり、先生の一言や友達の発言、自分の感想などを書く。

私の学生時代にはノートの書き方などは教えてもらったことがない。えらく丁寧なことだと感心した。文法は市販の文法ワーク本に沿って授業中に教える。各自の自主学習として漢字ワーク

本が与えられる。これは、ほぼ毎週20問の漢字テスト(5分)があるためである。ひとつの単元が終わるとまとめのプリント(白プリントと言われている)が配布され、自分で答えあわせをする。教科書、授業用ノート、文法ワーク、漢字ワーク、白プリント、これらはすべて提出物で、成績評価の対象になる。だから生徒たちは、とにかくこなして提出する。これだけ教材が与えられ、全てをこなしていれば、テストで満点しか取れないはずと思うのだが・・・。

そうではなかった。国語だけではなく、数学、理科、社会、英語、と他の教科もあるので生徒たちは毎日忙しい。それに国語は日本語だから・・・と軽んじられていることもある。特別勉強しなくても・・・と思うのだろうが、国語のできる生徒は他の教科も良くできる。問題を読み解く力がないと、他の教科も伸びないのだ。どの教科の問題文も日本語なのだから。資料も無料で与えられすぎているのかもしれない。「自分で考えずただ書き写すだけでは決して身につかない」と、私は生徒たちに毎日伝えた。

それはさておき、授業中は教科書を進め、漢字テストや暗唱テスト、読み取りテストをする。非常勤教師の時給は2880円。コストパフォーマンスとしては悪くないと思っていた。しかし、そこにはとんでもない事実が横たわっていた。

当たり前だが、テストをしたら、答えあわせをして、点数をつけなければならない。それに加えて、授業用ノート、漢字ワーク、文法ワーク、漢字やり直しノート(漢字テストの間違った字を練習する)、白プリントの提出物の内容を全て確認して判を押し、成績評価もしなければならなかったのである。2クラス80人分すべてにおいて、私ひとりでするのである。確か、教育委員会の人事担当者には「先生は、授業だけしてくださればいいのです」と言われた覚えがあるが・・・。

この現実、学校で2時間だけ授業していればできることではないのはい目瞭然だ。しかも生徒のテストもノートも個人情報物なので自宅には持って帰れない。私は学校に残って、それらを仕上げなければならなかった。午前中どころか、昼を過ぎ、夕方までかかることも多々あった。校長が見かねて「給食を食べた方がいいので

は？」と提案して、1食300円で週4日、給食を頼んだ次第である。

このように、授業だけでなく、実務時間は1日6～7時間学校にいたことになるので、実質時給は820円以下である。大阪府の労働最低賃金は992円である。私が勤務する以前にいた他教科の若い非常勤講師が「ケーキ屋でアルバイトしている方が、よほど気が楽」と言って去っていったという。「教師は聖職」と言われるが、むしろ神のような人間でないと教師は務まらないのかもしれない。また、私はミニバイクで通勤していたが2キロ未満なので1日100円の通勤手当だった。さらに、筆記用具、ノート、ファイル、ホッチキス、本立て、セロテープ、糊、ハサミ、ゼムクリップなどの必要備品は、チョーク以外、全て自分持ちであった。これは、市町村によって違うようで、大阪府の中でも政令指定都市では支給されているらしい。

非常勤講師の私の勤務状態がこれだから、フルタイム教員の労働環境はもっと過酷だ。担任、副担任になると毎日が大変だ。定時で帰宅するフルタイム教員は一人もいなかった。毎日19時、20時まで学校にいる教員がほとんどだ。授業や成績評価だけでなく、生活指導、家庭との連絡、クラブ活動の顧問、学校行事(入学式、卒業式、体育祭、文化祭、校外学習、修学旅行、など)、給食指導(生徒と主に準備し、一緒に食す)、清掃指導(生徒と共に行う)、そのほか、コロナ禍での人員削減による電球替え、植木剪定、学内消毒、床油引きまで。

教員免許がなくてもできることを教員自らがしているのである。しかも、どれだけ働いても残業代は出ない。誠に過重労働きわまりない。

#### 4 教員の現実

今も昔も、教員は尊い職業であることに変わりはないと思う。未来を担う子供たちにとって、多かれ少なかれ生きていくうえでの影響力も大きい。しかし、その大切な役目であるところの教員が日々の業務に追い立てられて疲弊すれば、子供たちにも影響する。

見るからにブラックで過重労働なのに勤め続けているのは、教員が他の世界を知らないという危

うさがある。そして、仕事の相手が人間だから、子供への愛情と義務感から手が抜けないのである。新米教員の私でも、テストでは目を皿のようにして採点し、ノートも一人一人80人の顔を思い出し、感想を書いたものだ。

授業の邪魔をする生徒にも怒ることができない現実がある。今は「教室を出ていきなさい」とは言えないのである。家庭内でしつけなければいけないことまで学校に求められる保護者からのプレッシャー、成績評価の複雑さ、ギガスクール構想の理想論・・・教員を取り巻く環境は決して良いとは言えない。まともに教材研究する時間も無い。教科教育以外の仕事が多すぎるのだ。

#### 5 5か月の教員生活

思ってもみなかった過酷な労働条件に、私は1カ月で心身ともにくたびれてしまい、市の教育委員会に辞めたいと申し出た。教育自体は楽しく自分の勉強にもなるのだが、あまりに時間を取られてしまい、心身ともに辛くなってしまったのである。市の教育委員会の人事の担当者と上司は業務内容を聞いて驚き、代わりがないので、必死に私を引き留めた。事実かどうかわからないが、教育委員会は現場を知らなさすぎるのである。教育委員会は、学校長に何とか私の労働を軽減するように掛けあった。そして、学校側は、私でなくてもできること(テストの採点、成績評価以外)を手伝ってくれる人員を学内で確保してくれ、私は何とか5カ月間を乗り切った。3学期の終業式の後、離任式で「救世主のように現れた清家先生」と教頭先生が言ってくれたが、私は「教師の皆さん、決して過労死しないでください」と言うしかなかった。

教員は、未来を担う子供たちに関われる、とても魅力的な職業だ。しかし心と体を病んで命を落としては元も子も無い。

#### 6 今後の課題

教育は、国の根幹である。医療もまた同じだ。今の日本は、それらをあまりにも疎かにしてはいないだろうか？人間の心と体を大切にしない国に未来は無い。

私が、教員の仕事を終えた直後に、文部科学

省が「教師のバトン」プロジェクトを立ち上げたのも皮肉である。教員の志願者が減る中、現場の教員に対し、ツイッターなどのSNS上で働き方改革の好事例や仕事の魅力などの投稿を呼びかけたのである。現場を体験した私は「文科省は墓穴を掘ったなあ」と思ったが、案の定、長時間労働や部活動の負担など文科省の想定を超えて窮状を訴える内容が相次ぎ、ネット上ですぐに炎上した。「とてもじゃないが、若者にバトンを渡せない」ということだ。

私も、大学生に話し方を教えているが、今のままでは、教員という職業は勧められないと実感している。

また、情けないことに、地元大阪でも「教育劣化」の惨状が表面化した。今年4月、コロナ禍の緊急事態宣言下で松井大阪市長が、ネット環境が未だ十分整備されていないにもかかわらず、オンライン授業を行うと市教委の頭越しに提案したことで小中学校の現場は大混乱した。

そこで学校現場の苦しみを大阪市立木川南小

学校長が「大阪市教育行政への提言」として送ったが、反対に文書訓告された。現場の校長の提言書に正面から向き合わず、市長や市教委の方針に異を唱えたことに対する「見せしめ」のような処分は、大阪人として情けない限りである。

大阪府は、教育現場だけでなく、コロナ感染死亡者が全国一で医療の現場もまたボロボロである。まずは、市民が府民が、現場を直視し、現場の声を拾って、事態を改善する本当に誠実な政治家を選ばなければ、大阪に未来は無いだろう。

教育現場の待ったなしの改善としては、

- ①少人数学級の実現
- ②教科教員の増員
- ③クラブ活動担当者の学外調達

まずはここから始めてほしい。プライベートの時間がほとんどなく、時間と命を削って子供たちに向き合っている教員たちを助けてほしい。